



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本人の宗教意識の諸相と主観的ウェルビーイング：計量的データ分析と検討 [全文の要約]
Author(s)	清水, 香基
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14286号
Issue Date	2020-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80606
Type	doctoral thesis
File Information	Koki_Shimizu_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 清 水 香 基

学位論文題目

日本人の宗教意識の諸相と主観的ウェルビーイング
：計量的データ分析と検討

本論文は、2017 年 7 月に実施された「宗教と主観的ウェルビーイングに関する調査」の探索的データ分析を通して、1)．「日本人の宗教意識」の類型の提案および測度の開発、2)．個々人の宗教意識のあり方が個人の主観的ウェルビーイング（以下 SWB）に与える影響の検討を行うものである。本論文は全 8 章からなる。前半の第 1 章から第 4 章にあたる「第 I 部 宗教意識と主観的ウェルビーイングに関する先行研究と二次的データ分析による検討」では、宗教意識と SWB に関する各国での先行研究を整理するとともに、世界価値観調査や ISSP 国際比較調査といった既存データの二次分析を行った。欧米社会との比較という観点から日本の宗教状況を概観し、その特殊性について検討するとともに、先行調査・研究において開発されてきた宗教性測度の分析的な道具としての有効性について検討を行なった。後半の第 5 章から第 8 章にあたる「第 II 部 全国調査を用いた宗教と主観的ウェルビーイングの構造および関係に関する実証的分析」では、第 I 部の研究から得られた知見や示唆を踏まえて企画・設計・実施された本研究の調査について概説し、その分析結果をまとめている。以下に、各章の要約を記す。

第 1 章「これまでの実証的研究の動向」では、宗教と SWB に関する実証研究の動向と理論的考察についてのまとめを行った。宗教と SWB に正の相関が認められることは、さまざまな社会・地域において報告されているが、大まかに分けると次の 4 つのメカニズムが想定されている。①宗教によってもたらされる実存的確信の効能、②宗教的な意味づけによる対処（コーピング）能力の滋養、③禁酒・禁煙等、信心深い生活態度による健康リスクの回避、④宗教共同体への参加を通じたソーシャル・キャピタルの獲得と強化、である。キリスト教やイスラム教のように、教理や教典にもとづいた明確な宗教的教えというものが一般的でない日本の宗教文化的な文脈においては、③のようなメカニズムは想定しづらいものの、それ以外については日本の状況でもある程度当てはめて考えることはできそうである。日本でも宗教性尺度の開発、SWB との関係の分析を行った計量的研究の事例はないではないが、その多くは、日本ではあまり一般的でない自覚的な信仰者の宗教意識と SWB の関係を取りあげたもので、広く一般の人の宗教意識を問題として取り上げた研究というものはほとんどない。

第 2 章から第 4 章にかけては、これまでの社会調査で用いられてきたさまざまな宗教項目と、欧米の社会学研究において採用されてきた宗教性尺度と「類似」のはたらきをする項目の検討－「概念操作化等価性」や「機能的等価性」と呼ばれるような「手続き上の等価性」のある項目の検討－を行うものである。第 2 章「欧米宗教社会学における宗教変動の諸理論と日本の宗教」では、欧米社会学において指摘されてきた宗教意識の「世俗化」と「私化」の命題を手が

かりとしながら、世界価値観調査や ISSP 国際比較調査の調査データを用いて、既存調査に収録されている宗教項目の「手続き上の等価性」についての分析を行った。「宗教の重要性」や「宗教的な人間か」を尋ねる質問項目から見ると、1 人あたり GDP と宗教性は負の相関関係にあり、経済発展にともなう世俗化の命題は支持されるように見える。日本では、これらの質問項目のワーディングで使用されている「宗教」という言葉に馴染みがないためか、経済発展の度合い対して不釣り合いなほどに「世俗的な国」という位置づけとなる。他方、「輪廻転生（生まれ変わり）」「涅槃（悟りの境地）」「祖先の霊的な力」を信じるかといった項目については信じる人の割合が相対的に高い。しかし、いずれの項目を採用するとしても、世俗化が進行によって予測されるような世代間の宗教意識の差が一貫して認められるようなことはなく、欧米の宗教性尺度との「手続き上の等価性」が確認されることはなかった。

第 3 章「日本人の宗教意識変容に関する分析－NHK『日本人の意識調査』データを用いたコウホート分析－」では、1973 年から 2008 年にかけて実施されてきた NHK 放送文化研究所の「日本人の宗教意識」の時系列データの 2 次分析を行った。同調査に収録されている 14 個の宗教項目についてコウホート分析を行った結果、「伝統的な宗教の実践形態をモデルとした規範的な宗教的行動・信念」において、世代交代に伴う信じる人の割合の低下が認められ、それに代わる新たな「必ずしも特定の神や仏を必要とはしないが、超自然的（神秘的）な世の中の秩序を志向するという意識」が出現しつつあることが認められた。こうした世代交代に伴う宗教意識の変化は、欧米社会学で指摘されてきた「世俗化」や「私化」の傾向とも一貫し、欧米宗教性尺度との「手続き上の等価性」の側面から見るならば、上記の項目を宗教意識の指標として採用することの妥当性が支持される結果となった。

第 4 章「日本人の宗教性の類型化・測定の試みと、その妥当性の検討－『手続き上の等価性の検討』を手掛かりとして－」では第 3 章に引き続き、NHK 放送文化研究所の「日本人の宗教意識」の 2 次分析を行った。まず潜在クラス分析によって、個人が有する宗教意識のあり方を「墓参りの習慣」「伝統的な信心」「現世ご利益志向」「スピリチュアリティ（個人化した宗教）」「制度的な宗教意識」の 5 つに大別した。各潜在クラスへの事後所属確率を宗教意識の各側面に対応する測度として分析を行った結果、単に習慣として墓参りをする程度といった人たちに比べて、それ以外の宗教性を高く有する人びとは「保守的な性規範」「政治参加や保守的な政治意識」「主観的ウェルビーイング」が高いという結果が得られた。しかし、上述の分析モデルにおける宗教意識の SWB への寄与はきわめて低く、本章の潜在クラス分析の結果から得られた類型を宗教意識の測度とすることについては、慎重な検討が促される結果となった。

第 5 章「『宗教と主観的ウェルビーイング』に関する調査の概要」では、2017 年 7 月に実施された「宗教と主観的ウェルビーイングに関する調査」の概要をまとめた。また、同調査に収録されている主要な社会経済的属性、社会意識、宗教意識の諸項目と SWB の関係について、クロス集計や平均の比較といった素朴な 2 変量分析から検討を行なった。社会階層、健康、人間関係に関する項目は SWB と高い正の相関関係にある。宗教に関する行動や信念に尋ねた項目についても、上記の諸項目と比べれば控えめではあるものの、SWB と正の相関関係にあることが認められた。

第 6 章「日本における宗教意識の主観的ウェルビーイングの構造」では、探索的データ分析に基づいて、日本人の宗教意識および SWB の構造についての検討を行った。宗教的行動や信念の諸項目についてそれぞれ因子分析を行った結果、いずれの場合も「伝統・慣習的な側面」「制

度宗教的な側面」「スピリチュアルな側面」という3因子が抽出された。因子間の関係について細かく見ていくと、宗教的行動ではいずれかの側面において高い実践の度合いを有している人は、他の側面に関連する行動はとらないといった排他的な関係にあることが認められる。他方、宗教的信念の諸側面については、各側面が相互に親和的であり、いずれかの側面に関する宗教的要素をよく信じるという人は、他の側面の要素についても信じるという違いが認められた。

SWBの構造に関する分析では、「主観的幸福感」と「生活満足度」という2つの代表的な指標を取り上げ、他の項目との相関の差異に注目することによって、それぞれがSWBのどのような側面を色濃く反映するものであるかの検討を行った。分析の結果、「主観的幸福感」は近い人間関係や個人の性向が寄与することが大きく、「生活満足度」については個人の客観的な生活状況が寄与することが大きいという傾向が認められた。

第7章「宗教と主観的ウェルビーイングの関係に関する分析」では、宗教意識とSWBの関係に関する分析を行った。第6章の分析から得られた因子得点を、宗教的行動および信念の測度とした上で独立変数に採用し、主観的幸福感を従属変数として重回帰分析を実施した。なお、統制変数としては、性別、年齢、学歴、婚姻状況、世帯年収といった基礎的な社会経済的属性や、主観的健康、一般的信頼、孤立感に関する変数変数を採用した。分析の結果、宗教的行動について言えば、「伝統・慣習的な側面」、および「制度的な側面」はSWBに有意な正の影響を有することが示された。他方、「スピリチュアルな側面」はSWBと負の相関関係にある。ただし、SWBにより強く寄与していたのは「行動」よりも「信念」の諸側面であり、宗教的行動と信念を同時に重回帰分析のモデルに投入した場合、宗教的行動の「伝統・慣習的な側面」がSWBに持つ効果は有意ではなくなった。このことは、伝統・慣習的な宗教的行動は、宗教的な「信念」を媒介した「間接的な効果」である可能性を示唆する。つまり、「初もうでに行く」「お盆やお彼岸に墓参りをする」「地域のお祭りに参加する」「神社で参拝をする」「お守りやおふだをもらう」といった、一見ただの慣習にも思われるような家族行事・地域行事が、人々の宗教的な考えかたの素地となり、それを滋養していくような、いわば宗教文化的資源として機能していることが示唆された。

後半部分では補足的な分析として、従来の研究でほとんど取り上げられることのなかった、氏子や檀家を中心とする宗教団体の所属への所属がSWBにもたらす影響について分析を行った。分析の結果、宗教団体に所属し、かつ宗教心の高い人たちのグループが最も高い幸福感を示した。他方、宗教心を伴わない宗教団体への所属は、むしろ幸福感を低下させる可能性があることが明らかになった。

最後の第8章「課題と展望」では、本論文の主要な知見をまとめるとともに、日本の宗教研究やウェルビーイング研究における意義と今後の課題についてまとめた。日本の宗教研究では一般に、欧米と比較してその「特殊性」が強調される傾向にあり、したがって宗教意識の測定は困難であるとして扱われてきた。他方、質問紙のワーディング上では大きく異なるように見えはしても、各国社会における調査研究の蓄積から、操作的に「類似」の働きをする宗教意識の測度を提案することは可能である。本論文では「概念操作化等価性」や「機能的等価性」と呼ばれるような「手続き上の等価性」という視点から、他の変数との関係において欧米と類似の振る舞いをする項目を考案し調査票に収録していくことで、特殊的日本な宗教意識のあり方が、しかし欧米諸社会と類似して人びとのSWBに寄与しているということを描き出すことを試みた。その結果、日本でも欧米諸社会と同様に、宗教意識が個々人のSWBに寄与するという傾

向が認められた。この結果は、しばしば単なる慣習に過ぎないと見做されがちな日本の宗教実践の諸形態が、個々人の SWB を下支えする文化的装置になっていることの可能性を示すものであり示唆深い。ただし、本論文で取り上げたのは、あくまでも「統計的に認められる有意な関係の有無」に過ぎない。今後、宗教意識が SWB に寄与するより具体的なメカニズムを検討していく上では、質的・量的な研究の往復からデータの向こう側にある人びとの現実生活に迫っていくことが肝要となると言わなければならない。